

ホセアの預言はどこか私たちの心のひだを逆なでするような「苦さ」がある。これでもか、という感じで、私たちの内面に問いかけて来る。特にこの書の冒頭の部分などは、ヤハウェの命令とは言え、「淫行の女を娶」ることを求められ、それに従うという、実に危うく陰しい事情が報告されていた。

なぜこのような預言が残ったのかと言えば、それはホセア自身が残したというより、それを聞いた人々が、彼の預言の真実性を、時を経た後に確信したからだ。その確信はもちろん、北イスラエル王国の滅びという、民族的な危機を経験したからであるが、それだけでなく、彼らもまた当時の婚姻をめぐる諸事情、そして売春の実態を含む都市（おそらくサマリア）の現実の悲惨な姿を裏も表も含めよく知っており、そしてその社会的な現実の罪深さを深く憂いていたからと思われる。

彼の預言は、彼自身の深刻な実存的危機も同時に投影しているように見える。つまり、彼自身の罪の自覚といってよいかもしれない。彼の預言は正直に言って礼拝で読むのは苦しい程だ。そこには姦淫、流血、淫行といったむごい言葉が飛び交い、彼自身を含む当時の北イスラエル社会の墮落が口を極めて攻撃されているからである。

ところで、このような社会の墮落は、ホセアに先立つアモスによってまず、指摘された。彼もまた、ヤハウェに捕らえられ、農民から預言者へと召されたのだった。そして、当時のサマリアの支配者たちに厳しい審判を告げた。他方ホセアは、アモスのような、どちらかと言えばまだ素朴に見える批判や非難、そして裁きの言葉とは違い、先に述べたように、非常に辛辣である。それはおそらく、彼を取り巻く社会の現実が色濃く反映されているからだろう。

さて、以下この断章を読み深めよう。北イスラエル社会の混乱は、それ自身の墮落が元だが、他方には当時の世界史的な変動、すなわち、アッシリア帝国の台頭というより深刻な歴史的転換があったためでもある。それはもちろん、私たちが過去を振り返ってみた理解の仕方である。当時の人々にとって、それが歴史的転換などとは感じられはしなかった。ただひたすら恐怖に震えたに違いない。しかし、そうした危機は、ホセアにとって、ヤハウェの裁きと映った。なぜ裁かれるのか？私は社会の混乱などと、やや漠然とした言い方を先にしたが、より具体的に言えば、イスラエルがその伝統的な信仰を棄て、さまざま異教の神々に自らを捧げたことである。例えば 4 章 12 節以下にはこうあった。「わが民は木に託宣を求め、その枝に指示を受ける。淫行の霊に惑わされ、神のもとを離れて淫行にふけり、山々の頂きでいけにえをささげ、丘の上で香をたく。檜、ポプラ、テレビンなどの木陰が快いからだ」。こうした宗教的墮落を、ホセアは「淫行」「姦淫」などと呼んだ。

こうした墮落の中にありながら、ホセアは、はたして自分たちの未来はどうなるのだろうか、ただひたすら滅びに向かうだけだろうか、と苦悩する。彼はこれまでの自分の預言を顧みて、過激で厳しい預言を告げてきた自分の限界のようなものに気がついたのではないか。預言は批判や審判だけで終わるのではない。むしろ、それを越えた展望をもたらさなくてはならない。そうしなければ、未来は閉ざされてしまうだろう、そんな風に思ったのだろう。それゆえ、預言者ホセアは救いの預言を語り始めたの。その預言の一部がこの断章であると思う。

1 節には、「まだ幼かったイスラエルを私は愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした」とある。これは出エジプト記 4 章 22 節に伝えられているモーセに向けてのヤハウェの言葉を思い起こさせる。「主はこう言われた。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。……』」というヤハウェの言葉は、イスラエルはヤハウェに特別に選ばれたことを意味する。しかし、これは偶然でもないし彼らが偉

かったからでもない、それどころか彼らが弱く虐げられていたゆえに、憐れみをもって「子」とされたのであった。ホセアは神ヤハウェのそうした選び、あるいは恵みを神の「愛」と呼んでいる。そしてその愛ゆえに、ヤハウェは彼らをエジプトから呼び出したのであった。ホセアにとって出エジプト伝承はヤハウェの愛の行為として想起されているのである。ところでこの愛はどのような愛であるか？普通にみれば、それは親の愛、とりわけ父の愛と比べられる。しかし、よく見ると、ヤハウェはイスラエルを「わが子とした」とあるから、これはいわば養子としたということだ。つまり、これは単なる自然な親子関係ではない。これはヤハウェとイスラエルとの契約に基づく親子関係である。これはもちろんあのシナイ山での契約をホセアは考えているに違いないが、要するに、両者の関係は二次的・作為的なものなのだ。それがたとえ、神の自然な憐れみから始まったとしても、神が彼らを愛するのは、無制約的なものではない。つまり、愛するのには限界があるということだ。それは、民がヤハウェだけを愛する、という一途な思いを持つ限りにおいてということである。その限りにおいて、ヤハウェはイスラエルを子として育み、また守るであろうというのである。

しかしながら、イスラエルはエジプトを出て早々に、カナンのパアル宗教に染まり、墮落したという(2節)。それはイスラエルの神ヤハウェを棄てることにほかならないが、それは単に選ぶ神を間違えたということではない。もちろん、民にとって実のところ利益があるなら神は何でもよかったという可能性もある。しかし、ホセアをはじめ預言者たちはみな、ヤハウェを捨てることと別な神を選ぶことは相対的なことでなく、絶対的な差があることを見抜いていたのだ。つまり、エジプトから解放してくれた神ヤハウェを捨てることは、自ら進んで自由を捨て、再び自分を奴隷の地位に戻すことに他ならないということである。

神は結局どれも似たようなものだからとか、どれもそれなりに恐ろしいものだから、などと考え、適当に平等にあしらっておけばよいと、古代のイスラエルの民も考えたのかもしれない。いやもっと言えば、神の力など、もはや信ずるに足らないとさえ考えたのかもしれない。そこまではないとしても、結局は人間の力、軍事力という名の暴力こそが、最後はモノを言うとは考えたのだろう(10章13節後半参照、さらに14章4節も)。なぜなら、ホセアの時代のアッシリアの力は、素朴な信仰など圧倒してしまうからだ(もちろん、先に言及した通り、イスラエル内部の権力闘争も結局武力闘争であった)。

3節には「エフライムの腕を支えて歩くことを教えたのはわたしだ」とある。ヤハウェは北イスラエルを確かに育んだと言う。しかしさまざまな危機や困難に際して助けてきたのに、彼らはそのようには思わなかった。

4節には、非常に重要な言葉が現れる。「わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き、彼らの顎から軛を取り去り、身をかがめて食べさせた」。ここにはやや解釈の難しい「人間の綱」という言葉が出る。これは人間(アダム)ではなく、「真実」などの別な言葉に読み代えるべきだという提案もあるが、やはりこのまま「人間の綱」と読んでおきたい。するとその後の「愛のきずな」と「人間の綱」は同格ないし、言い換えと見ることができるだろう。つまり、神の導きとは、人間同士の愛を通して知られるということ。隣人を自分のように愛せよというレビ記19章18節の言葉は、人間同士の愛、お互いに慈しみ助け合うことだが、ホセアはそれを神の愛の力の表れとみているといってよい。もちろん同時に、その愛は神にも感謝として同時に向けられることによって、完成する。ホセアは、神が「愛のきずな」で導いてきたことを確信する。おそらくそれは子であるイスラエルが荒れ野時代というまだ幼かった時代、罪を犯してきたにもかかわらず、その幼さゆえに彼らを養ってきたことを言っているのだろう。

しかし今や、そうした幼かった時代に戻ることはできない。ましてや、エジプトに難を逃れることもできない。なぜならほどなくして、アッシリアの支配に服すほかないからだ。5節にはそうしたもはや留め

ような歴史が預言されている。それは、ホセアに言わせれば、彼の時代の民の墮落と背信の結果なのである。すなわち神の審判である

このような事態に及んで、なぜかホセアは急転回する。否、正確には神ヤハウェ自身が完全に思い直す。「ああ、エフライムよ、お前を見捨てることができようか。イスラエルよ、お前を引き渡すことができようか」と。つまり、かつてアドマやツェボイムのようなヨルダンの低地の町が、ソドムやゴモラともども滅ぼされたように、サマリアが滅ぼされてよいだろうかと、ヤハウェ自身が問い直し始める。自らが子として選んだ町を自ら滅ぼすことは、結局は自分自身の恥になるのではないか。なぜなら、自分の子を滅ぼすという極めて残酷なことは、親として許されないからだ。それは深刻な責任の放棄ではないか。

ここには、アッシリアによって蹂躪され、陥落したサマリアの風景が前提されているかもしれない。それゆえに「わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる」とあるのだろう。神ヤハウェは、悔いる神である。そしてイスラエルを愛する神である。神ヤハウェはいかにイスラエルが墮落し、さらに滅びに至るとしても、それを捨て去ることはしない。それは神自身が自らを貶めることになる、つまりはあの出エジプトの出来事において示され、実現されたあの「自由」なる共同体を無効にしてしまうからである。

そこで9節では、「わたしは、もはや怒りに燃えることなく、今後エフライムを滅ぼすことはしない」と宣言した。そして「わたしは神であり、人間ではない、お前たちの内にあって聖なる者」と語るが、これはあらためてイスラエルの神はヤハウェであることの確認である。神ヤハウェが中心に戻ることによって、ついにあの理想的な神政政治がもう一度完成するというのだろう。もはや「怒りをもって臨みはしない」のである。

さて、この断章からわたしたちは何を汲みとることができるだろうか。

ホセアは神の愛について繰り返し語る。それはもちろんキリスト教の教義だからではない。当然である。ホセアはキリスト教にはるかに先立つ時代の預言者なのだから。そもそもイスラエルが歴史に登場したのは、振り返って考えれば、神の愛の行為によるのであった。その愛は、イスラエルが罰を受け、滅びに直面している時こそ、かえって高まらざるを得ない。つまり、審判を実現してそれで終わりではないということ。重要なことは、神は人間のために改めて憐れむということだ。人間はもちろん罪をもともと担っている。そして死という限界を個人において持っている。人間とはそうした欠けの多い被造物であるが、それを創造したのは神自身である。だからこそ、神は創造者として、つまり親として、父として、大いなる責任がある。だから神は怒ると同時に、自身の未熟さを知るといってもよい。「わたしは神であり、人間ではない」という言葉は、単に創造者と被造物の区別を言っているのではなく、私は創造者であり親であるからこそ、子であるイスラエルを寛容な心をもって赦すのだ、ということを暗に語っている。すなわち、神の愛は、最終的には赦しにおいて完成する。その寛容さを、果たして人間の側が知ることができるのだろうか。それはホセアの時代においてはまだわからない。それを本当に知ることができるのは、はるか後の時代の、あのキリストの出来事においてである（とわたしたちキリスト教の側は言うだろう。わたしたちキリスト者は、あの十字架の出来事と復活の信仰において、確かにその寛容と赦しを知ることができたのだ）。それでも、ホセアはおそらくそのことをおぼろげながら想像していたに違いない。なぜなら、イエスの十字架には及ばないにせよ、彼自身の生涯が、苦難そのものだったからだ。ホセア書の冒頭に戻ってみると、彼は淫行の女を娶るという明らかな困難、律法にもとる行為をよりによって神自身から命じられているのだから。彼自身、「苦難の僕」の位置を不完全とは言え、占めているとも言えそうである。